

中国蓮宗所依經典の演變及び株宏の選定

苑 克 柱（宗柱）

一 現行の蓮宗所依經典及び選定の原則

現行の中国の蓮宗（浄土宗）における所依經典（宗經）は、中華民国時代に蓮宗第十三祖の印光法師（1862-1940）により選定されたものである。中華民国二二年（1933）に、印光は、既成の浄土四經を基礎とした上で、改めて五部の經典を選定し、それを蓮宗における所依經典としたことで確定された¹⁾。その選定の原則と因縁をめぐって、印光は次のように述べている。

無量壽經（中略）觀無量壽佛經（中略）阿彌陀經、此三、乃專談淨土之經。而阿彌陀經、攝機尤普。以故禪・教・律各宗、鹹皆奉為日課焉。諸大乘經、帶說淨土者、多難勝數。而楞嚴經大勢至念佛圓通章、實為念佛最妙開示。（中略）故將此章、列於三經之後、而以普賢行願品殿之、以成淨土法門之一大緣起。

1) 甘沁鑫氏は、現行の中国蓮宗の所依經典には、浄土五經の他、もう一つの伝統（五經一論）があることを指摘している。印光は浄土五經を主張すると同時に、清末の楊仁山が提唱した三經一論も認可した。五經一論は、浄土五經と三經一論を総合した結果であると述べている（『楊文会與三經一論觀念的引入和展開：兼論晚清民国浄土宗根本經典的兩個傳統』、『宗教学研究』、2020年第4期）。

五經一論は、具体的にいつ頃に成立したかが知る由もない。少なくとも印光がいた中華民国時代には、このような言い方はまだなかった。五經一論説は、印光以降の蓮宗宗經の新たな演變と見なされて良い。現行の蓮宗の中で、浄土五經は依然として主流の観点であるので、本稿では現行の蓮宗宗經に言及する場合、とくに説明しないかぎり、一律に浄土五經を指す。

『無量寿経』（中略）『観無量寿経』（中略）『阿弥陀経』、この三経は、専ら浄土を説く經典である。そのうち、『阿弥陀経』は、衆生の根機を摂受するのがとりわけ広い。それゆえ、禪・教・律の各宗派は、みなそれを日課として受持している。諸の大乗経の中に、浄土について説くものは枚挙に暇がない。そのうちの『楞嚴経』の大勢至念仏円通章は、実に念仏の最も良い開示である。（中略）そのため、それを三経の次にならべ、そして『普賢行願品』を最後に配置して浄土法門の一大縁起を完成する。

金陵浄土四経板、已經模糊。修浄業者、苦無最清爽之讀本。因為鑄板、以勢至念佛圓通章附於三経之後、稱為浄土五経²⁾。

金陵刻経処の浄土四経の版本は、印刷がかすれてしまっている。浄業を修する者は、きれいに印刷された讀本がないことを嘆いている。だから改めて鑄版して、『楞嚴経』の大勢至念仏円通章を三経の後ろ（『普賢行願品』の前）に置き、それらを浄土五経と総称する。

このように印光は専説浄土經典と兼説浄土經典とともに選定したことになる。五部経の中に、中心的なのが専説浄土の浄土三経であり、それに兼説浄土の『楞嚴経』大勢至菩薩念仏円通章と『普賢行願品』とが加えられたのである。このように明確に専説經典と兼説經典を分別することは、金陵刻経処で開版された浄土四経には見られなかった。

はたして印光の選定は、彼の独自の構想であるのか、それとも歴史上その原型があるのか。本稿では、蓮宗が形成されて以来の所依經典の演變と形成に対して整理を加え、それによって印光が所依經典を選定する理論依拠及びその演變の大勢について究明を加えたい。

2) 「浄土五経重刊序」、『印光法師文鈔続編』卷下、巴蜀書社、2016年、7-8頁。

二 宋代:浄土七經の形成及び宗暁の選定

蓮宗の所依經典が中華民国になってはじめて定型化されたのは、蓮宗の形成そのものに関わることである。

通常、一宗派の立教開宗においては、その草創期に、当該宗派の祖師によって所依經典が選定され、そして教相判釈を通して、一代聖教を判釈し、それを仏教における最高の經典として定めることで、その宗派が成立するものである。天台・華嚴・法相・密宗のいずれもが、このように成立したはずである。

しかし、蓮宗の成立はそうではなかった。蓮宗は天台学者によって立教開宗された。南宋時代の天台の宗暁(1151-1214)と志磐(生卒年不詳)は、前後して『樂邦文類』と『仏祖統紀』を著し、それらの中で蓮社(蓮宗)の伝承系譜を確立し、それを諸宗と並列させた。これによって、蓮宗は「教」(教義)から「宗」(宗派)とされ、独立した一宗派になったわけである。

しかるに、宗暁と志磐が定めた蓮社六祖(或いは七祖)のうち、慧遠(334-416)・善導(613-681)であれ、法照(746-838)・少康(?-805)・省常(959-1020)等であれ、彼らが浄土教の所依經典を明示することはなかった。六祖(或いは七祖)のうち、ただ善導は『観念法門』の中で、浄土教には六部の往生經³⁾があることに言及しただけである。しかし、善導本人は、浄土教の所依經典を確立する意識を持っていなかったようである。また彼が示した六部の往生經の説は、後世の浄土教に継承されることはなかった。

おそらく宗暁はこの点を意識しただろうか、彼は『樂邦文類』の中で、若干の浄土經論要文(經四十六処・呪十一道・論六処)を選定したほか、また以下のように一六部の「專談浄土經論」を特定した。

大藏專談浄土經論目錄

佛說無量清淨平等覺經、佛說阿彌陀經(阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經)、

3) 善導『観念法門』に示される「六部往生經」とは、『無量寿經』『観無量寿經』『阿彌陀經』『般舟三昧經』『十往生經』『浄度三昧經』を指す。『大正藏』第47冊、24頁下。

佛説無量壽經、大寶積經無量壽如來會、佛説大乘無量壽莊嚴經、佛説阿彌陀經、稱讚淨土佛攝受經、佛説觀無量壽佛經、後出阿彌陀佛偈經、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經、般舟三昧經、佛説如來烏瑟膩沙最勝總持經、無量壽如來修觀行供養儀軌、無量壽優波提舍論、阿彌陀經不思議神力傳、集諸經禮懺儀⁴⁾。

宗暁が示した一六部の専談淨土經論は、当時流伝していた淨土七經を基礎とした上でそれを補充したものである⁵⁾。宋代の天台淨土教においては、淨土七經という言い方が流行していた。『仏祖統紀』の記載によれば、宋代の天台宗僧の思照（生卒年不詳）は、

師於淨土七經一字一禮⁶⁾。

思照法師は淨土七經の一文字を読誦するにつけ一礼された。

冲益（生卒年不詳）は、

刺血書淨土七經⁷⁾。

指を刺して流れる血液で淨土七經を書写された。

宋代の天台淨土教においては、すでに慣例として一般的に認められる淨土教の所依經典が定まり、しかも相当に流行していたことがわかる⁸⁾。こうした背景下において、宗暁の淨土經論に対する特定は、蓮宗のために所依經典を選定

4) 『樂邦文類』卷1、『大正藏』第47冊、150頁中-151頁中。

5) 「以上經論傳集一十六種、並專談淨土。故十疑論云、藏中有數十餘部經論、殷勤指授勸生西方是也。先賢謂淨土但有七經者、其不審乎。」『樂邦文類』卷1、『大正藏』第47冊、151頁中。

6) 『仏祖統紀』卷14、『大正藏』第49冊、222頁上。

7) 『仏祖統紀』卷27、『大正藏』第49冊、279頁中。

8) 宋代の淨土七經は、具体的にどの七部を指すかが不明である。宗暁の所述（注5を見る）によると、宗暁を選定した十六部經典に含まれるはずである。明代の弘道は、（明代天台僧大佑の）『阿彌陀經略解』の跋文の中で「七種大乘偏讚極樂淨土（經典）」に言及し、また「小本彌陀經、即偏讚七經之一也」と述べている。要するに、宋明時代の天台淨土教においては、淨土七經（或いは:七種大乘偏讚極樂淨土經典）という説が存在していたのである。

する意味合いが含まれている。

宗暁による選定は、蓮宗成立後における最初の所依經典選定の作業であった。ただし宗暁は一六部の經論を特定したと言っても、何の価値批判もせずに羅列しただけで、それらをみな同格に扱っている。一六部の經論の中に、專説淨土の諸經があるが、数部の密教經呪・儀軌も含まれており、また『集諸經礼懺儀』のような中国撰述の儀礼書も含まれている。だから宗暁の選定は彼自身が言う「專談淨土經論」の原則に合致せず、選定に成功したとは言いがたいのである。

三 明代:淨土三經の形成及び株宏の選定

宗暁に続いて明代の株宏(1535-1615)は、改めて蓮宗の所依經典を選定した。先に述べたように、通常、一宗の所依經典の判定は、当該宗派の祖師によって一代聖教の中から選ばれて判教が加えられ、それを最高の經典に判釈することによって成立するものである。株宏はあらゆる經典の中から『阿弥陀經』を選び、それを蓮宗の根本經典とし、そして『阿弥陀經』に対する判釈を通して、淨土經典の地位を確立したのだった。

株宏の淨土判教については、『阿弥陀經疏鈔』の「藏教等撰」に詳細に記されている。株宏が採用したのは中国の代表的二種教判(天台教判と華嚴教判)の華嚴宗の五教判である。株宏は華嚴五教の中で『阿弥陀經』を正しく頓教に属し、兼ねて始教と終教に通じ、円教を分通すると判釈した⁹⁾。

株宏は『阿弥陀經』を円頓教典の地位を与えた後、蓮宗の所依經典を提示した。

已知此經、宗趣冲深、未審當部等類、為有幾種。

初先明部者、部有二種。一謂大本、二謂此經。

二明類者、自有三種。一觀經、二鼓音王經、三後出阿彌陀偈經。

三明非部類者、帶説淨土、如華嚴法華及起信等。又非部類、而中説專持名號、如文殊般若¹⁰⁾。

9) 『阿弥陀經疏鈔』卷1、『新纂統藏』第22冊、613頁上。

10) 同上、618頁中下。

この経の宗趣が深いことはすでに理解したが、部類等においては、それぞれ何種類があるのかわからない。

初めに部を明かすとは、部には二種がある。一は大本『無量寿経』であり、二はこの経（『阿弥陀経』）である。

次に類を明かすとは、類には三種がある。一は『観無量寿経』、二は『鼓音声王陀羅尼経』、三は『後出阿弥陀偈経』である。

三に非部非類を明かすとは、浄土を兼ねて説く経論であり、『華嚴経』『法華経』『起信論』等である。また非部非類の中で専持名号を説く經典もある。例えば『文殊般若経』である。

株宏が選定した經典の中には三つの等級がある。

先ず、株宏は、専説浄土であるか否かをもって、所依の經典を部類と非部類の二類に分ける。

部類經典は、専説浄土の經典であり、『阿弥陀経』『無量寿経』『観無量寿経』『鼓音声王陀羅尼経』『後出阿弥陀偈経』等の五種がある。株宏は、それらを「部類五経」¹¹⁾「専談極楽五経」（専ら極楽を談する五経）¹²⁾と呼んでいる。

非部類經典は、兼説浄土の經典のことであり、『華嚴経』『法華経』『大乘起信論』等がある。『文殊般若経』は浄土經典ではないが、専ら持名について説いているので、この非部類經典の中に含まれる。

次に、株宏は部類經典から『無量寿経』と『阿弥陀経』を同類に判釈し、それらを同部経と呼ぶ¹³⁾。他の三部経は、これら二経との関係が浅いので、同類ではあるが同部ではないと理解する。

11) 同上、607頁下。

12) 同上、607頁下。

13) 株宏がなぜ『無量寿経』と『阿弥陀経』を同部経に判釈するかについては、株宏自身は明言しなかった。隋唐以来、『無量寿経』は「大経」「大本」と呼ばれ、『阿弥陀経』は「小経」と呼ばれ、両経同源説は、比較的流行していた。例えば、宋代の遵式は、『阿弥陀経勤持序』の中で次のように述べている。「此經文句雖約、與大本意同。上聖赴緣、廣略異耳」（『樂邦文類』卷2、『大正藏』第47冊、167頁中）

もしかしたら、株宏にとっては、大小経同源説は常識であるので、とくに説明する必要がなかったのかもしれない。

実践の中で、株宏はまた專説浄土の部類五經をさらに簡素化させ、浄土三經を提唱していた¹⁴⁾。例えば、雲棲寺の大堂には、大堂に入る際に各自で浄土三經（『阿弥陀經』『觀無量壽經』魏訳『無量壽經』）を携帯すべきことが規定されている。

堂中各具浄土三經。一彌陀經疏鈔、二觀經疏鈔、三新刻古本大彌陀經¹⁵⁾。
大堂では各自が浄土三經を備えなさい。一は『阿弥陀經疏鈔』、二は『觀經疏鈔』であり、三は新刻した古本の『大阿弥陀經』である。

さらに、株宏は浄土三經の中で『阿弥陀經』を中心に置き、『阿弥陀經』は三經の中で最も殊勝であると考えた。その理由としては、『阿弥陀經』の持名は、『無量壽經』の願門と『觀無量壽經』の觀法を包含するだけでなく、よく要約されているからであるとする。

指四十八之願門、開一十六之觀法、願願歸乎普度、觀觀宗乎妙心。

上讚浄土法門之勝。今於浄土、先出餘經、然後較量此經更為殊勝。願門・觀法、具在二經。……

又以願門廣大、貴在知先、觀法深玄、尤應守約。知先則務生彼國、守約則惟事持名。舉其名兮、兼眾德而俱備、專乎持也、統百行以無遺。即前大本・觀經、較而論之、知持名尤為要約也。¹⁶⁾

14) 浄土三經の形成年代は不明である。智旭は、『阿弥陀經要解』（撰述年代は清順治4年、1647）の中で、「浄土三經並行於世」と述べ、（『大正藏』第37冊、363頁下）清初に、浄土三經はすでに相当に流行していたことを示している。

宋代にすでに類似する言い方が存在した。例えば、宋代の源清は『觀無量壽經頌要記』の中で「浄土之教有三、一大本兩卷、(中略)一小本一卷、(中略)一今經」と述べている。（西村岡紹監修・梯信暁著『宇治大納言源隆国編安養集本文と研究』、百華苑、1993年、497頁）それにもかかわらず、現存する文献から見れば、浄土三經という言い方は株宏の主な活躍時代（即ち、万暦年間1573-1619）より早くはない。

15) 『嘉興藏』第33冊、158頁上。

この「古本大阿弥陀經」が魏訳『無量壽經』であることについては、以下の彭際清の「新刻浄土三經序」の記述より知られ得る。「大本多遵龍舒王氏所訂。其魏譯古本、塵封大藏、自雲棲外、受持誦讀者蓋尠焉」（彭際清『一行居集』卷3、江蘇省広陵古籍刻印社、1990年、2丁裏）。

16) 『阿弥陀經疏鈔』巻1、『新纂統藏』第22冊、605頁下。

四十八の願門を示し、十六の観法を開示する。各願文は普ねく衆生を救い、各観法は寂静の心を肝要とする。

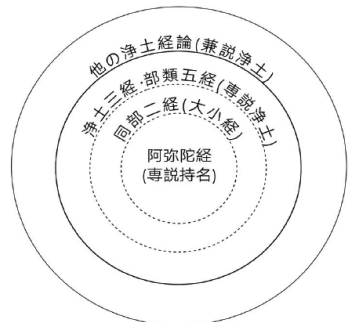
ここまでは浄土法門の優れた点を賛嘆した。今は浄土教において、先ずは他の經典を出し、次いでに比較してこの經がより殊勝であることを示す。願門と観法はすべてこの二經（『無量寿經』『觀經』）に示されている。

また願門は広大であるが、知先を貴ぶ。観法は深妙であるが、とくに守約すべきである。知先しようとしたら、彼の国に生まれないといけない。守約しようとしたら、持名しないといけない。その名号を挙げれば万徳を兼ねながら具備する。専心に執持すれば百行を統攝して残ること無し。前の大本『無量寿經』と『觀經』と比較すると、持名はより簡約された行であるということがわかる。

これは、中国浄土史上、はじめて浄土三經に対して価値輕重の判断が下されたことを意味する。株宏が三經を判釈する標準は、專説持名であるか否かということであった。株宏は『無量寿經』『觀經』『阿弥陀經』を、それぞれ願門を説く經典、観法を説く經典、持名を説く經典に位置づけた。『阿弥陀經』の持名は『無量寿經』の願門や『觀經』の観想の簡約であり、かつ二經を統率することができるので『阿弥陀經』は他の二經より優れると考えた。

このように、株宏は実際にはあらゆる浄土經典を四類に分けた。最も中心に位置するのは『阿弥陀經』である。次は同部の二經である。次は、專説浄土の浄土三經或いは部類五經である。その次は、兼説浄土の諸經論であった。

この四類のうち、前の三類には重なる部分がある。図示すれば、次の通りである。



表：株宏の所依經典觀（点線は重なりがあることを表し、実線は重なりがないことを表す）

浄土經典に対する判釈から、株宏の浄土教学の中心は『阿弥陀經』の持名念仏を弘めることであったということがわかる。

以下、宗暁と株宏が査定した經典の異同を比較することを通し、宋代から明代までの蓮宗所依經典の変化の大勢を究明したい。

宗暁が選定した一六部經論 ¹⁷⁾	株宏が選定した三類經典 ¹⁸⁾
<p>浄土經 佛說無量清淨平等覺經一部二卷、後漢月支三藏支婁迦讖譯 佛說阿彌陀經一部二卷、吳月支三藏支謙譯 佛說無量壽經一部二卷、曹魏三藏康僧鎧譯 大寶積經無量壽如來會卷第十七十八、大唐三藏菩提流志譯 佛說大乘無量壽莊嚴經一部三卷、大宋太宗朝西天三藏法賢奉詔譯 <u>以上五經、(中略) 五譯之中、文相頗明、取曹魏本。以故祖師諸文多引用之。</u> 佛說阿彌陀經一卷、姚秦三藏法師鳩摩羅什譯(天台觀經疏指此經為小本、前無量壽經為大本) 稱讚浄土佛攝受經一卷、大唐三藏法師玄奘譯</p>	<p>部 部有二種、一謂大本、二謂此經。大本有六。 一名無量平等清淨覺經、後漢支婁迦讖譯 二名無量壽經、曹魏康僧愷譯 三名阿彌陀經、吳支謙譯 四名無量壽莊嚴經、宋法賢譯 五出寶積第十八經、名無量壽如來會、元魏菩提流志譯 <u>六名佛說大阿彌陀經、宋龍舒居士王日休者、總取前之四譯、參而會之。</u> <u>上六種、皆名大本。今此經者、名為小本。</u></p>

17) 『樂邦文類』卷1、『大正藏』第47冊、150頁中-151頁中。

18) 『阿弥陀經疏鈔』卷1、『新纂統藏』第22冊、618頁中-619頁上。

<p>佛説觀無量壽佛經一卷、宋元嘉中罽 良耶舍譯 後出阿彌陀佛偈經一卷、後漢失譯 阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經一卷、失譯 般舟三昧經一部三卷、後漢月支三藏 支婁迦讖譯</p>	<p>類 類者、自有三種。 一觀經 二鼓音王經 三後出阿彌陀偈經</p> <p>非部非類 華嚴 法華 文殊般若 觀佛三昧 十住斷結諸經</p>
<p>密教經呪・儀軌 佛説如來烏瑟膩沙最勝總持經一卷 無量壽如來修觀行供養儀軌一卷 阿彌陀經不思議神力傳（往生咒）</p>	
<p>印度浄土論 無量壽優波提舍論一卷</p>	<p>非部非類 起信</p>
<p>中国撰礼懺儀 集諸經禮懺儀二卷</p>	

上表の比較によって、以下の点が判明した。

(1) 株宏と宗暁との選定の最大の相違は、宗暁は単に所依の經論を羅列しただけであるのに対し、株宏は所依の經論に価値判断を行い、あわせて価値の軽重・親疎によって明確な分類をしたことである。

(2) 株宏が選定した部類經典は五種十部がある。これは宗暁が選定した六種十一部の数量とほぼ同じである。株宏が選定した諸經は基本的に宗暁から取ったものである。しかも、彼が部類經典と非部類經典を判釈する標準（專説浄土であるか否か）も、宗暁の標準を採用したものである（ただ、宗暁はこの標準を執行しなかった）。株宏と宗暁との選定の間には一定の継承関係が見られる。

(3) 宗暁が選定した經論の中には数部の密教經呪が含まれている。藤田宏達の統計によれば、印度で成立した浄土經典（のべ290部）のうち、密教部經典は138部あるという¹⁹⁾。天台宗では、智顛（538-597）以来密教を重視し、天台懺法の中には大量の密呪が混入している。宗暁の選定は天台宗が一貫して密教を重視する特色を表している。その一方で、株宏が選定した所依經典はみな大乘顯教の經典ばかりであって、密教の色彩は除かれている。

(4) 印度撰述の論典のうち、宗暁は『往生論』を提示し、株宏は『大乘起信論』を提示した²⁰⁾。両者は經を重視すると同時に論も重視していたのである。現行の蓮宗の所依經典のうち、浄土五經の他、五經一論（『往生論』）の説も頗る流行している。經兼論の伝統は古くからある。ただし、宋明時代に『往生論』はまだ諸論の中において突出していたわけではなかった。

(5) 中国撰述の『集諸經礼懺儀』は株宏によって削除された。

(6) 株宏の十部の專説浄土經典の中には、王日休（1105-1173）が合糅した『大阿弥陀經』（以下、王糅本と略称する）が示されている点は重要である。しかも、株宏はそれを五種原訳と同格に扱い、真經としている。

王糅本は1162年に成立し、宗暁の『楽邦文類』は1200年に編纂された。宗暁の時代に、王糅本はすでに相当に流行していたようであるが、宗暁自身は王糅本を所依經典の中に編入せず、しかも五種原訳本のうち、魏訳本を選び取った。それは諸祖がよく引用して賛嘆するからであると説明している。

以上のことから、宗暁の時代における主流の観点としては、『無量寿經』テキストの使用に対しての考えが統一していたことがわかる。即ち、『無量寿經』は王日休による合糅本を用いるのではなく、原訳本を使用するということである。

しかるに、株宏の時代に王糅本は広く流通し、明南北二蔵（明南蔵・明北蔵）に入蔵されたことさえある。株宏は魏訳本を提唱し、王糅本の欠失を指摘したものの、また王糅本を所依經典に編入し、それを真經とし、しかも『阿弥陀經

19) 藤田宏達『原始浄土思想の研究』、岩波書店、1970年、138-139頁。

20) 株宏は別の場合、また專説浄土の四經一論を提示した。そのうちの一論は、世親の『往生論』である。

「阿彌陀經、大無量壽經、十六觀經、鼓音王經、天親往生論、以上略舉專説浄土經論。」（『雲棲浄土彙語』、『新纂統蔵』第62冊、11頁上）

疏鈔』の中で大量に王糝本を引用している。この矛盾する態度はその時代における現実を反映したものであるといっても、後世に合糝本が出現し広まってゆくことを助長したとも言えるだろう。

以上、宗暁・株宏の二人による選定から見ると、宋明時代の浄土所依經典に対する選定は、雑より専に至ると同時に、『無量寿経』の合糝本が登場し始め、しかも原訳本を凌駕する勢いが出現したのである。

四 株宏より印光へ：浄土五経の最終定型

株宏は蓮宗の第八祖として所依經典を選定したと同時に、一つの問題を残した。それは、彼が王糝本を真経としていたことである。その後、『西方合論』の作者である袁宏道（1568-1610）と『阿弥陀経略解円中鈔』の作者である伝灯（1554-1628）は、この株宏の観点を踏襲した。彼らは或いは王糝本を五種原訳と同格に扱い（袁宏道）²¹⁾、或いは『無量寿経』を引用する時、原訳本を差し置いて王糝本を引用した（伝灯）。株宏と同時代の馮夢禎（1548-1606）が印施した浄土三経の『無量寿経』もやはり王糝本を採用している²²⁾。

清代・中華民国時代に入ると、『無量寿経』テキストの使用をめぐる意見の混乱は続いていた。この時期に多種版本の浄土三経と浄土四経が出現した。

先ず、清中期の彭際清（1740-1796）は株宏の影響を受け、浄土三経の流通を提唱した。しかし、彼はその中の魏訳本『無量寿経』に対して節略の編集を行った。その後、魏源（1794-1857）は浄土四経を提唱した。その中の『無量寿経』は、彼が五種原訳によって編集した合糝本である。魏源の浄土四経は、清末・中華民国時代に楊仁山（楊文会、1837-1911）の金陵刻経処によって刊行されて流通し、

21) 袁宏道『西方合論』巻3：「第三部類門（中略）一、經中之經者。一無量平等清淨覺經、二無量壽經、三阿彌陀經、四無量壽莊嚴經、五出寶積第十八經、名無量壽如來會。五經同一梵本、前四譯稍不精。六即大阿彌陀經、龍舒居士將前四譯和會者。」『大正藏』第47冊、395頁中。

22) 馮夢禎「刻浄土三経縁始」：「三經者、佛說阿彌陀經、觀無量壽佛經與大阿彌陀經是也。大阿彌陀經、乃龍舒居士王古參衆譯而成者。」『快雪堂集』巻30、『四庫全書存目叢書』集部164冊、6頁。

一定の影響力を持っていた。このように、蓮宗第十三祖の印光以前の清代・中華民国時代に、『無量寿経』テキストの使用は、合様本が原訳本にほぼ取って代わった状況だった。

浄土三経（四経）	時代	印施提唱者	『無量寿経』の版本
浄土三経（大小経・観経）	明末	株宏	『無量寿経』（魏訳）
浄土三経（大小経・観経）	明末	馮夢禎	王日休合様本
浄土四経（大小経・観経・行願品）	明末清初	永覚元賢	『大宝積経・無量寿如来会』
浄土三経（大小経・観経）	清中期	彭際清	彭際清合様本
浄土四経（大小経・観経・行願品）	清末	魏源	魏源合様本
浄土四経（大小経・観経・行願品）	清末・中華民国	楊仁山（金陵刻経処）	魏源合様本

明清時代の浄土三経・浄土四経

中華民国二二年（1933）に、印光は改めて蓮宗の所依經典を選定し直し、金陵刻経処の浄土四経の中の合様本を退けて魏訳本に取り替え、また『楞嚴経』大勢至菩薩念仏円通章を新たに加えて五部の經典を選定し、それらを「浄土五経」と呼んだ。ここに至り、蓮宗の所依經典は正式に定型化されたのである。その後も合様本の流行は完全に抑止されることはなかったが、それでも原訳本の地位が揺らぐこともなかった。

以下、株宏と印光が選定した經典の異同を比較対照し、印光が選定した所依經典の特色及び明代から中華民国時代までの蓮宗所依經典の変遷趨勢を確認してみたい。

株宏が選定した三類經典	印光が選定した浄土五経
部 部有二種、一謂大本、二謂此經。 大本有六。	阿弥陀経 無量寿経（魏訳）

<p>一名無量平等清淨覺經、後漢支婁迦讖譯。 二名無量壽經、曹魏康僧愷譯。 三名阿彌陀經、吳支謙譯。 四名無量壽莊嚴經、宋法賢譯。 五出寶積第十八經、名無量壽如來會、元魏菩提流志譯。 六名佛說大阿彌陀經、宋龍舒居士王日休者、總取前之四譯、參而會之。 上六種、皆名大本。今此經者、名為小本。</p>	
<p>類 一觀經 二鼓音王經 三後出阿彌陀偈經</p>	<p>觀經</p>
<p>非部非類 華嚴 法華 文殊般若 觀佛三昧 十住斷結諸經 起信</p>	<p>華嚴經・普賢菩薩行願品 楞嚴經・大勢至菩薩念仏円通章</p>

上表によって、以下の点が判明した。

(1) 印光による所依經典はさらに精選された。株宏が選定した経論は十一種十六部あり、これは宗暁が選定した数と同程度であるが、印光はわずか五部だけを残した。

(2) 印光は『無量寿経』合様本を所依經典から退けて原訳本を採用した。しかも、五種原訳本の中、魏訳本の一つだけを提示し、『無量寿経』の異訳テキストが多いことによって引き起こされていた混乱を回避した。

(3) 五部はいずれも経であり、論典は含まれていない。

(4) 『楞嚴経』大勢至菩薩念仏円通章が正式に蓮宗所依經典の中に選定され

た。円通章は宗暁の浄土要文の經四十六処の中に示されたが、專説浄土の十六部經論には入選されなかった。『楞嚴經』大勢至菩薩念仏円通章を重視したことは印光教学における一つの大きな特色である。

このように、明代から中華民国時代まで、浄土所依の經典は多より簡に至り、さらに集約された。印光は蓮宗の祖師として、明清以来の『無量寿經』の異訳テキストの使用をめぐる見解の相違に対し、魏訳本だけを用いるという見解を提示した。ここに至り、魏訳本の地位は再び確立されたのである。

五 結語

蓮宗が成立して以来、所依の經典は三回の大きな選定を経た。最初の宗暁による選定は、ただ各種經典に価値批判をすることなく羅列しただけのものであった。次の株宏は專説浄土經典と非專説浄土經典の違いを峻別した。そして最後に印光は株宏以来の浄土三經・浄土四經を基礎とした上で、所依經典の數量を五經に限定した。

こうして、宋代から中華民国時代まで、蓮宗所依經典の選定は雜（宗暁）から專（株宏）に至り、多（宗暁・株宏）から簡（印光）に至り、ついに定型化されたのである。なお、印光は明代以来『無量寿經』合標本の問題をめぐる引き起こされてきた意見の相違を統一し、再び原訳本を用いることとし、五種の異訳テキストの中から魏訳本だけを選んでその地位を確立した。

印光と株宏の選定は、以下の二点では一脈相に通じる。

(1) 『阿弥陀經』を根本宗經とする点

彌陀經、為淨土法門之根本法門²³⁾。

『阿弥陀經』は浄土法門の根本法門である。

此三、乃專談浄土之經。而阿彌陀經、攝機尤普。以故禪教律各宗、鹹皆奉

23) 「復胡宅梵居士書二」、『印光法師文鈔三編』卷上、巴蜀書社、2016年、261頁。

為日課焉²⁴⁾。

この三經（『無量壽經』『觀無量壽經』『阿彌陀經』）は、専ら浄土を説く經典である。そのうち、『阿彌陀經』は、衆生の根機を撰受するのがとりわけ広い。それゆえ、禪・教・律の各宗派は、みなそれを日課として受持している。

（2）專説浄土經典と兼説浄土經典を峻別する点

印光は、終始、浄土三經は專説浄土の經典であり、その他の兩經（『華嚴經』普賢菩薩行願品と『楞嚴經』大勢至菩薩念仏円通章）は兼説浄土であり、專説浄土の三經と兼説浄土の兩部經には親疎・輕重の違いがあるという態度を堅持していた。

阿彌陀經・無量壽經・觀無量壽佛經、此名浄土三經、專談浄土緣起事理。其餘諸大乘經、鹹皆帶説浄土²⁵⁾。

『阿彌陀經』『無量壽經』『觀無量壽佛經』、これらは浄土三經と名づけ、専ら浄土の緣起事理を説く。その他の大乘經はみな兼ねて浄土教を説く。

彌陀經、為浄土法門之根本法門。行願品、雖廣大深妙、究非浄土法門之根本法源。故宜二經同念、斷不可只念行願、不念彌陀。（中略）二經固無高下、而對於浄土行人、卻有親疏²⁶⁾。

『阿彌陀經』は浄土法門における根本法門である。『普賢行願品』は廣大深妙ではあるが、あくまでも浄土法門の根本法源ではない。だから二經をともに読誦しても良いが、決して『普賢行願品』だけ読み、『阿彌陀經』を読まないことがあってはならない。（中略）二經には、もとより高下の差はないが、浄土教の行者にとっては親疎の區別がある。

24) 「浄土五經重刊序」、『印光法師文鈔統編』卷下、巴蜀書社、2016年、8頁。

25) 「與徐福賢居士書」、『増広印光法師文鈔』卷上、巴蜀書社、2016年、107頁。

26) 「復胡宅梵居士書二」、『印光法師文鈔三編』卷上、巴蜀書社、2016年、261頁。

現行の蓮宗の所依經典は印光によって定められた浄土五經であって、株宏によるものではないが、株宏が經典を選定した原則は印光による選定においても継承されているのである。